近代文学研究叢書

第十三巻

昭和女子大学
近代文学研究室

監

修

吉田澄夫（国語学）
本間久雄（近代文学）
細川清（劇文学）
保坂都（国文学）
人見圓吉（近代文学）
濱徳太郎（美学）
能勢賢（国語学）
成瀬正勝（近代文学）
内藤濯（仏文学）
辻村鑑（英文学）
玉井幸助（国文学）
島田謹二（比較文学）
山宮允（英文学）
佐藤幹二（国文学）
笹澤美明（独文学）
佐々木八郎（国文学）
佐本八郎（英文学）
坂木由修（和歌文学）
木俣英（歴史学）
河井寶二（英文学）
金子健二（英文学）
片桐顯智（和歌文学）
荻原水泉（俳文学）
太田三郎（比較文学）
上井磯吉（英語学）
石森延男（児童文学）
池田龜鑑（国文学）

口絵写真

石川啄木

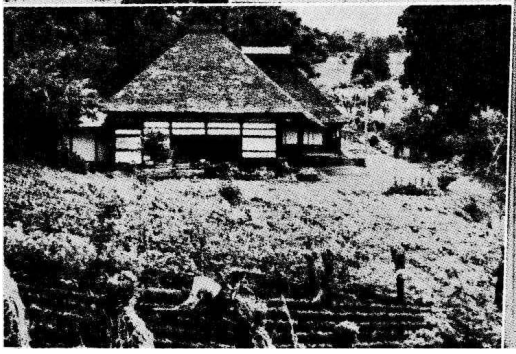
田岡嶺雲

F・ブリンクリ

鹽井雨江

木村正辭

石川啄木

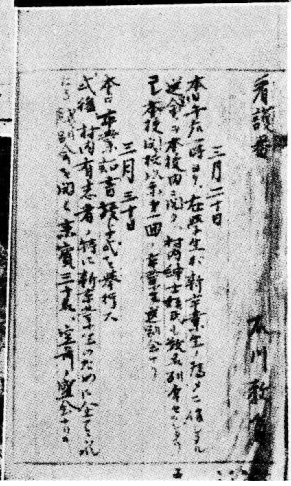


日戸村常光寺―啄木生家（石川正雄氏蔵）

啄木肖像―後列向って右端、前列右端宮崎郁雨
明治四十年六月函館「紅苜蓿」同人たちと（石川正雄氏蔵）

中央、金田一京助氏宛書簡（明治三十八年四月十一日付）
左、釧路の啄木歌碑の前の金田一京助氏と近江じん氏（昭和二十六年）

「あこがれ」明治三十八年五月三日刊
（昭和女子大学蔵）



「看護番日誌」―渋民小学校代用教員時代明治四十年三月
（渋民小学校蔵）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

田　岡　嶺　雲

嶺雲肖像　左より嶺雲，得能文，島文次郎
藤岡作太郎（昭和女子大学蔵）

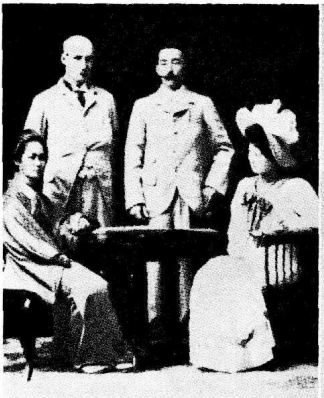
左上―「病中放浪」の表紙
明治四十三年七月十五日刊
（昭和女子大学蔵）
左中―「壺中我観」の表紙
明治三十九年三月六日刊
（上野図書館蔵）

↑「青年文」―巻六号―明治二十八年七月十日刊
（昭和女子大学蔵）

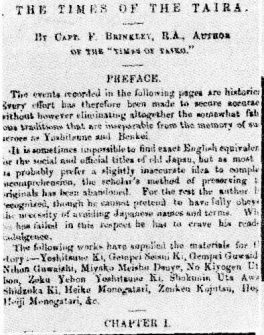
↑嶺雲の筆跡
中央―「嶺雲揺曳」
明治三十二年三月二十八日刊
（昭和女子大学蔵）

右上「下獄記」―明治三十四年七月二十三日刊　（昭和女子大学蔵）
右中「天鼓」第一号―明治三十八年二月二十三日刊（東京大学明治文庫所蔵）

F・ブリンクリ



一九〇七年頃撮影　向って左より安子夫人、F・ブリンクリ、長男ハリ、次女稻子
（J・R・ブリンクリ氏蔵）



THE TIMES OF THE TAIRA.

BY CAPT. F. BRINKLEY, R.A., AUTHOR OF THE "TIMES OF TAIKO."

PREFACE.

The events recorded in the following pages are historic
Every effort has therefore been made to secure accurac
without however eliminating altogether the somewhat fab
ous traditions that are inseparable from the memory of su
heroes as Yoshitsune and Benkei.

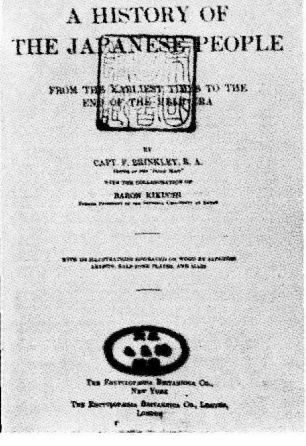
It is sometimes impossible to find exact English equivale
for the social and official titles of old Japan, but as most
is probably prefer a slightly inaccurate idea to comple
incomprehension, the scholar's method of preserving
originals has been abandoned. For the rest the author
recognized, though he cannot pretend to have fully obey
the necessity of avoiding Japanese names and terms. Wh
he has failed in this respect he has to crave his read
indulgence.

The following works have supplied the materials for
story:—Yoshitsune Ki, Genpei Seisui Ki, Genpei Gwesai
Nihon Gwaishi, Miyako Meisho Dzuye, No Kiyogen Ut
boo, Zoku Yehon Yoshitsune Ki, Shokunin Uta Awa
Shidzuka Ki, Heike Monogatari, Zenkoku Kojitsu, Hog
Hogji Monogatari, &c.

CHAPTER I.

一八七九年七月十二日発行ジャパン・ウィクリー・メール紙に掲載された「平氏時代」の一部
（上野図書館蔵）

次男J・R・ブリンクリ氏
（現存せる唯一人の遺族）



A HISTORY OF THE JAPANESE PEOPLE

FROM THE EARLIEST TIMES TO THE END OF THE MEIJI ERA

BY CAPT. F. BRINKLEY, R. A.

WITH THE COLLABORATION OF BARON KIKUCHI

THE ENCYCLOPÆDIA BRITANNICA CO., NEW YORK

THE ENCYCLOPÆDIA BRITANNICA CO., LONDON

上「語学独案内」内容の一部—明治六年刊
（昭和女子大学蔵）

中　麻布広尾町にあったブリンクリ邸宅
（J・R・ブリンクリ氏蔵）

下「日本民族史」扉—一九一四年刊（上野図書館蔵）

塩井雨江

晩年の肖像

「国文学大綱」巻之三の扉
明治三十一年六月刊（上野図書館蔵）

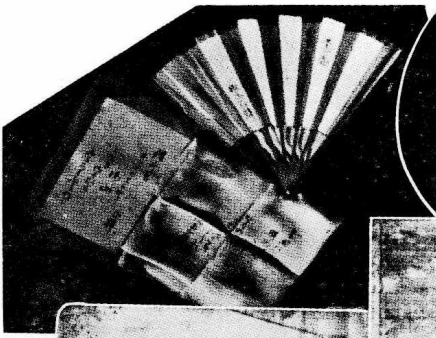
文學士塩井雨江
文學士武島羽衣 合著
文學士大町桂月
國文學大綱 巻之三
香川景樹

「新古今集詳解」―明治三十年十一月刊（上野図書館蔵）
雨江自筆の鉛筆書き原稿

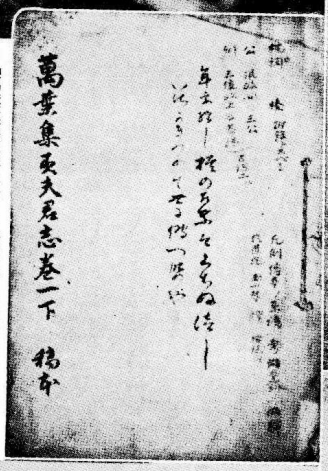
文學士 塩井正男著
新古今集詳解 巻一
東京 明治書院

→「湖上の美人」―明治二十七年三月刊（昭和女子大学蔵）

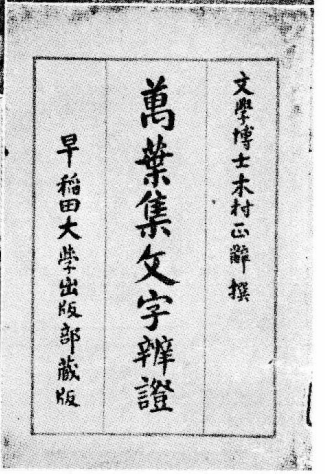
木村正辭



正辭晩年の肖像（木村正己氏蔵）



「萬葉集美夫君志」自筆稿本（木村正己氏蔵）
↑遺品　扇、色紙、袱紗　（京須忠雄氏蔵）



正辭が晩年住んでいた東京市入谷町三十五番地の家↑
（木村正己氏蔵）
右二段「萬葉集美夫君志」―明治三十四年五月十六日刊
（昭和女子大学蔵）
「萬葉集文字辨証」―明治三十七年二月二十三日刊↗
（昭和女子大学蔵）

目次

口絵
第十三巻の成立……昭和女子大学 近代文学研究室…（一〇）
凡例……昭和女子大学 編集室…（一五）
石川啄木……（一七）
田岡嶺雲……（二〇九）
F・ブリンクリ……（二八九）
鹽井雨江……（三四一）
木村正辭……（三九七）

第十三巻の成立

本巻は明治四十五年四月から大正二年四月の間に歿した左の五名の調査研究を収めた。

石川啄木は岩手県岩手郡日戸村常光寺に生まれ、のち同郡渋民村に移り、少年時代は神童とよばれた。盛岡中学時代短歌や詩を作り、明治三十五年與謝野鐵幹を知り、詩作に専念して「愁調」五篇を「明星」に投じ、三十八年五月処女詩集「あこがれ」を刊行した。この頃渋民村を去り、夫妻で盛岡に新居を構え、雑誌「小天地」を刊行したが経済的失敗で廃刊、生活も窮迫した。三十九年四月渋民村小学校の代用教員となったが、現況に慊らず、小学生のストライキ指導などのことがあって、北海道に渡り各地の新聞社を転々、辛酸をなめた。この頃から次第に現実的、社会的な関心をたかめた。四十一年四月満身創痍の状態で上京、友人金田一京助のもとに身を寄せ、自然主義風の小説を執筆、長篇「鳥籠」を東京毎日新聞に連載した。観潮楼歌会に出席して「スバル」の編集にも加わったが、この頃彼はすでに新詩社の浪漫主義に批判的となっており、同人との折り合いも円滑を欠き、まもなく遠ざかった。四十二年三月朝日新聞の校正係となり家族を東京に迎えたが、貧窮と家庭の紛糾は一層彼を苦しめた。四十三年十二月歌集「一握の砂」出版、歿後刊行の「悲しき玩具」とともに短歌を現代語で表現し、民衆の声、感情を自由に詠みこなし、今に至るも共感を呼び人々に愛されている。その三行書きの表記は口語自由律短歌発想の誘因ともなった。彼は北海道、東京と苦難の連続で現実直視の眼が見

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

開かれ、晩年は社会主義に接近「時代閉塞の現状」を論じ、国家と国民の矛盾を衝き、空疎な文学に対して「食ふべき詩」を強調した。遺稿の詩集「呼子と口笛」は革命を夢みて情熱を燃しつつ到達した詩境である。こうして窮乏と焦躁のうちに四十五年四月、二十七歳の短生涯を閉じた。

田岡嶺雲は明治三年高知県に生まれた。南国的風土と自由民権論発祥の社会的環境の感化により情熱的で一種革命的な資質を享けた。十四歳、京都の官立中学校に学び同級に山縣五十雄がいた。二十三年上京、水産伝習所を経て文科大学漢学科選科で漢文学を専攻、卒業後同志と雑誌「東亜説林」を出し東亜学院を設立、講義録を発行し、東洋文化の究明につとめ、第一号に蒙古史を掲載した。二十八年山縣と「青年文」を発行、縦横に才筆を揮い、有閑文学を放棄して下流細民の悲惨な運命とその生涯を描き、天下に訴えよと論じ、のちこれらの論説をまとめて「嶺雲揺曳」を出版、歓迎をうけた。二十九年岡山県津山中学教師、翌年十月帰京、三十一年水戸の「いばらぎ新聞」主筆として東京を去り、翌年五月に上海に渡り、肺を病み三十三年帰国、北清事変には「九州日報」従軍記者として天津に赴き、同年八月「中国民報」主筆として岡山に赴任、官吏侮辱罪にとわれ二ヵ月の重禁錮刑を受けた。その時の記録が「下獄記」である。三十八年二月雑誌「天鼓」を創刊、文明の危機と非文明の思想を訴え、同年四月「壺中観」を出版、発禁となり窮迫の末同年三たび大陸に渡ったが健康を害し四十年帰国。同志と「東亜新報」「江湖」などを発行、四十一年には病状悪化の中で雑誌「黒白」を発行し、「明治叛臣伝」を出版した。四十五年五月湯河原天野屋旅館で逮捕前の幸徳秋水と同宿した。七月日光に転地療養、「数奇伝補遺」を執筆、文章家としての最後を全うして九月七日数奇な生涯を終えた。

彼の社会主義は平民社一派の経済を基盤としたものとは自ら異なり、彼の言に従えば仁、慈、愛に出発した人道主義的な平等観で、文華の発展がもたらした貧富の懸隔と世道人心の頽廃を憂える道徳観を加味した主観的、理想主義的なもので、非科学的な点は見のがせない。

F・ブリンクリは一八四一年アイルランドの名門に生まれた。祖父ジョン・ブリンクリは有名な天文学者、数学者であった。F・ブリンクリはダブリンのダンガノン及びトリニチイ学寮で数学、古典学を修め非凡な才能を示した。卒業後ロンドン郊外のウーリッジにある英国陸軍砲工学校で砲術を学んだ。慶応三年二十六歳のとき日本に派遣され、逝去まで約四十五年間日本を離れなかった。日本の風土と人間に魅了され、衷心から日本を愛しつづけた。日本語に熟達し、日本婦人を妻とし、日本を研究し紹介し擁護することを終生の使命とした。人材たることを勝海舟等に認められ、明治四年海軍省御雇となり、海軍砲術学校の主任教師を五年間つとめ、十一年七月帝国工部大学校の数学科教師に任命され、二ヵ年余勤務。十四年一月ジャパン・メイル紙を買収して自らその経営者兼主筆となった。この以前すでに「太閤時代」「平氏時代」等の続き物語を同紙に連載、好評を博していた。今や文才を発揮する場を得、その社説に於て常に日本の擁護と正しい紹介に尽力し、条約改正、日英同盟等では陰の力となって活動した。日清戦争後ロンドン・タイムズの日本通信員となり、その日本に関する記事は世界的に驚嘆と親愛感をもたらした。死の近づいた彼が、乃木大将の殉死は日本武士道精神の発揚である旨の四十余字の口述電報をロンドン・タイムズに送り、外人の誤解をといたという逸話もある。大正元年十月、数寄を凝らした麻布の自邸で死去、七十一歳。著書に英文法独習書として声価の高かった

「語学独案内」があり、六種の日本歴史に関する大著述がある。中でも大英百科辞典第九版「日本に関する項」六十余頁と菊池大麓との共著になる英文「日本民族史」は価値の高いものと言えよう。

鹽井雨江は明治二年兵庫県豊岡に生まれ、六歳のとき一家とともに上京。二十年第一高等中学校文科に入学、大町桂月、武島羽衣等と相識った。二十六年浅香社の短歌革新運動に加わる。七月東京帝国大学国文科に入学、在学中「女鑑」に古今婦人伝を連載、「あらずもの哉」という漫筆をものして、女子の教養と道徳の向上につとめた。二十七年三月英詩人スコット原作の「湖上の美人」を訳出した。全篇七五調で、洗練された雅語麗句を駆使してスコットランドの中世紀的な異国情緒、騎士道、冒険譚などを巧みに邦語に移し、原作の浪漫的詩情を彷彿させたので、西欧の長詩の飜訳を範として発展しつつあったわが新体詩にも影響を与え、一般の好尚にも適し、多くの版を重ねた。二十八年「帝国文学」が創刊され、編集委員となり創刊号に長詩「深山の美人」を発表、桂月、羽衣とともに新進の赤門派擬古詩人として注目された。二十九年七月大学卒業。「女鑑」にはひきつづいて小説、新体詩、美文のほか、「歌の栞」「紀貫之」「土佐日記と紀貫之」等を連載した。同年十二月には桂月、羽衣と共著の美文韻文集「花紅葉」を出版、青年文章家に愛読され、三十一年には「香川景樹」を発表、井上通泰との間に論争があった。「女鑑」に連載した「新古今和歌集講義」を基として、三十年十月から四十一年三月に至る間に大作「新古今和歌集詳解」全七巻を刊行し国文学に寄与すること甚大であった。三十一年には出雲の簸川尋常中学校に教頭として迎えられ、三十四年退職。六月美文韻文集「暗香疎影」を出版した。三十五年から四十三年まで日本女子大学校国文科教授として専念、四十三年七月奈良女子高

等師範学校教授となり古都の風物に接し「西行の研究」など計画の途中、大正二年二月胃癌のため四十五歳で死去。遺作「病床の声」八十五首の短歌に悲痛の思いがこもっている。

木村正辭は文政十年千葉県成田に生まれ、十六歳のとき木村家の養子となった。若くして小中村清矩とともに伊能穎則に入門、和歌、国学を学び、傍ら岡本保孝に師事して音韻学を修め、万葉集研究の素地を築き、安政二年、万葉集の文字、訓義、字音に関する三弁証の著がある。慶応の初め、従来の万葉集諸本、研究書、註釈書の書誌学的研究に手をつけ「万葉集古注遺文」「万葉集書目提要」「万葉集書目」等を著わした。明治二年史料編輯御用を命ぜられ、ついで文部権大助教として「語彙」の編纂に参与、七年文部省より国史編纂を命ぜられ黒川眞頼と任に当たり、十三年東京大学法学部、文学部員外教授に任ぜられ、太政官に出仕、二十二年「万葉集美夫君志」巻一の前半と「万葉集書目提要」上下が大八洲学会から刊行され、二十三年東京学士会院会員に挙げられ、その後東京大学文科大学、高等師範学校の教授に歴任、二十六年九月一切の官職を辞し専ら万葉の研究に打ち込み、国学院、早稲田大学等に出講の傍ら、東京学士会院雑誌、新国学、大八洲雑誌、国学院雑誌等に万葉研究の成果を発表した。三十四年文学博士の学位を授けられた。大正二年四月逝去、八十七歳。彼の万葉学の態度は岸本由豆流の万葉集攷証や狩谷棭齋、岡本保孝等の研究方法に負うところ多く、広く諸本を蒐集して厳密な本文批評を行い、随唐以前、六朝時代の文字や音韻学の知識を活用して万葉集の用字、音訓を論考し、ひろく和漢の文献により博引旁証して、訓釈に新生面を開いた。「万葉集美夫君志」「万葉集三弁証」は代表的著述で考証学者としての科学的態度がよくあらわれている。

凡例

一、研究調査に着手してから本叢書刊行に至るまで、凡そ二十二年を要しているので、指導者中で岡田哲藏、福井久藏、池田龜鑑の三先生はすでに鬼籍に入り、研究担当者中にも病でたおれたものが数名ある。本叢書をこれらの人々に見てもらったならばさぞおよろこび下さるであろう。謹んで霊前に献上する。

二、本叢書は卒業期に近い学徒の中から担当者を選び、調査研究の範囲、方法、次第などを相談して、先ず第一に業績の検討に着手した。不明、疑問、困難、迷路などにつき当りつつ一年ぐらいするうちに明瞭になるので、次の年から生涯と遺跡を究めてからいよいよ論文作成にとりかかった。このとき、材料の批判、整理、布置、論文の構成などについて相談しながら脱稿に至る。ついで修訂、校閲を経てから編集という順で、その間約二カ年が費される。

三、収録事項の研究に対し、直接間接に協力した学徒は延三千名に上るが、その協力と、歳月の恩恵に加うるに学界、文壇、教育界、操觚界など各界先輩の懇切な教示と、遺族及び関係者の好意を感謝する。

四、年表で著作というのは、発表が生前と死後とを問わずその作者の作品のすべてを指し、資料とは、第三者の考説、論評、感想等の文献を指すのである。従って死後刊行された全集物や編集物は著作年表に、第三者の解題や解説の如きは資料年表の中に収めた。又、単行本の中で編集ものは、所要の小題を書題名欄に、書名

と発行所を誌紙名欄に、小題の執筆者を筆者欄に掲げることとする。

五、年表の末尾に追込んだ分は氏名のみが引用されている場合が多い。資料の価値は研究の分野、方向又は時代によって移動するものであるから、できるだけ取捨をさける方針にしたが、紙面の都合で割愛の止むなき場合がないともかぎらない。

六、各稿の末尾に「採訪」と「文献」を掲げたのは、研究調査の際に訪問して教示を仰ぎ、便宜を与えられた方々に感謝の意を表すると同時に、資料の出所、起稿や修訂に当って参考した文献書目を記して、その依拠を明らかにした。ために研究資料の所在表示を旨とする「資料年表」と一部重複することがある。なお採訪した人の記名は年齢（推定）順、文献の記載も発表年次順にした。

七、引用文はすべて原文に従い、外国文の場合は訳文を添付するが、通読に便するため時に大意を用いることもある。なお原文中の誤りや疑わしい箇所は右側に（ママ）と記入し、又、異本を示す場合も同様（イ）と記入する。

八、外国の国名、地名、人名は片仮名を原則とし、倫敦、桑港のように慣用久しいものでも、逐次片仮名に改めるつもりである。但し、すでに日本語化しているものはこの限りでない。

九、邦人氏名は旧漢字を用い見出しに振りがなをつけ、外人名の初出は原語を付し以下片仮名を用いる。

一〇、年代は日本年号と西暦とを適宜織りまぜて、どちらからでも検索できるようにした。年齢は満年齢を採用したが、場合によっては数え年何歳としるすこともある。

（昭和女子大学編集室）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com